

YA

2006
No.
24



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。



私の稀観本ノート その24

○好きな歌・嫌いな歌『團伊玖磨』
椎窓 猛

川はうたうさようなら
筑後平野の百万の生活の幸を
祈りながら川は下る
有明の海へ
筑後川 筑後川
その終曲あゝ

作詩丸山豊、作曲團伊玖磨の合唱組曲『筑後川』は、去秋10月22日、大川の文化ホールで演奏会が催された。中野政則氏らの肝入りで、小国町で始まった『筑後川』は流れに沿った町での演奏会が、河口大川にたどりつき、一応の終幕となった。思えばありし日の作曲家を偲ぶ郷愁あふれる演奏会となった。

作曲家團さんはまたすばらしいエッセイで、続、続、また、また、とえんえん続刊『パイプのけむり』は広く親しく読まれて、広く知られている。しかし、この『好きな歌嫌いな歌』は(昭和52年刊)さして知られてはいないのではないかと思う。

歌集・両手握れば 大坪 公子
夕がすみれんげ畑を包むとき幼き思いあふれくるなり
呆けた人等歌いて笑い合う呆けることのなんぞ恐るな
アルツハイマーの夫守りて妻一人おしろい花の庭を作れり
杖ひきて庭歩みおりし夏の日にかぶりし白帽棺に入れぬ
奥会津宮古の幸にはぐくみし秋の終りの蕎麦こそうまし
厳しくも医学に生きたる会津人 野口英世の像に雪積む



○歌集「両手握れば」

大坪 公子

東京、世田谷区に内科臨床医として、医療活動の最先端にあって繁忙精励の先生は、短歌の道にも一途に精進である。あとがきに、「よい精神を持たなければよい歌は出来ない。人間の本性に根ざしたものがよい歌になる」と、人間を磨いて、よい精神をもって、よい歌を——と、願いつづけられての精華がここに歌集として美しく結晶している。ya第20号に、大坪先生の歌集「在宅酸素」を紹介しているのが、このたびは、人生史サークル『黄櫨』の熱心な会員倉ノ下和代さんとは縁戚に当たられるとの話で、この歌集を格別の思いで親しく読ませていただいた。大坪先生のご健筆を祈念し、さらに歌集が続刊されますよう期待申します。

團さんが痛烈に批判しているのは、文部省唱歌がだれが作詞し、だれが作曲したか分からない、要するに個人名滅却、著作者名を消すという木っ端役人の発想が嫌い。それだけでも文部省唱歌は好きになれないが、“秋の夕日に照る山紅葉”はよく詠んでいると述べられている。團さんはすばらしい童謡を作曲されているが、二歳の幼児すら口ずさむ『ぞうさん』について、「ぼくはそうした歳月の移りのなかでこの小さな歌が子供の心の中に、平和の中のひとつの小さな小さなしじまとして生き続けていることを、そして小さな歌にも歴史が宿っていることを、作った人間としてとても嬉しく思っている」と述べられている。戦後、上野動物園に、インドのネール首相が象を贈ったときに作曲されたものである。作詞は、まどみちおさんである。

(自分史図書館長)



○ 富永シヅ物語
椿 六郎

福岡運輸株式会社様よりの寄贈。

「これは世の中に必要な仕事だから」の一念で、50年前に、国産初の冷凍車定温輸送網を作り、台所への生鮮食品輸送の大改革者、富永シヅさんの一代記。

この女性社長さんは、長崎女子師範卒。成績抜群、そのまゝ付属小の先生へ。子どもの教育に生涯を捧げたいとの念願であったが、漁師の親方の嫁へ。早逝のご主人の後を継いで家業を守り、漁業会社復興。日本中に生鮮食品を届ける低温輸送網を構築したパイオニア。しかし柔かな物腰、淑やかな振舞の女社長と見受けられる。



○ 陸軍へんこつ隊長物語
さむらい商法編
後藤四郎

かつては陸軍軍管区参謀長の要職にあった松村少将、そして私にしても歩兵第321連隊長。世が世であれば数千人の兵を率いて、戦場を馳駆する身。

戦い敗れて、リュックバックに上官と共に鉛筆を詰め、文房具行商。

「なあに、ここは砲弾は飛んでこないんだ。命さえあれば」と幾山越えての行商体験記である。

後藤隊長いわく、「人生はただの一度しかない、そのかけがえのない人生を明るく・・・若さをもってと奮闘の人生談義。



現代女流川柳鑑賞事典 田口麦彦編著

号泣のあとで花瓶の水を替え
スタンスを変えろと風もやわらかい
シャボン玉好きな高さで割れている
応援のとぎれた橋の上走る
生きるとは難儀バス停まで走る
寝ころんで下さいと咲くれんげ草

伊藤 美幸
門谷たず子
金子美知子
久場 征子
佐藤 貴子
長谷川博子



○ チャコと私のこころの旅路
水城 央

水城さんは介護ヘルパー2級資格を取得し、現在、介護美容師として高齢者優先、介護出張サービスの美容室を経営。

この物語は、愛猫チャコとの生活交流記である。「夏が過ぎて初秋に入ると、我が家に来てから二年目を迎えるチャコは、見違えるほどおちゃめなレディーになった」といった文章で明快に描きだされている。愛しくてやまなかつたチャコは逝く。そこでチャコへの鎮魂歌として、言葉の中に永く生き続けることを願っての物語というわけである。

声明の天へ響きて秋澄めり
みどり子の百日の笑みや秋高し
白秋生家土間ひんやりと秋沈む
うつむきて秋のひまわり日を追へり
憂きこともうする風
風に折れなほコスモスの乱れ咲く
秋雨の午後やしずかに針持ちて
浅田つぎ子

町野由美子
深町ちなみ
藤島千代子
永田 富子
柴田 純子
井口登美子
日を追へり

筑後俳句——11月——

編集掌記

▼私は旅に出た場合、たいしてその町の書店に寄つて、「郷土出版」のコーナーを見る。そこを見れば、

その町の文化度、文化力が測定されるように思われる。十一月十三日、二泊三日で、信州をまわってきた。軽井沢から上田市「高原文庫」それから戦没画学生の遺作品を展示した美術館「無言館」へと急ぎ足の旅であったが書物は宅配便に依頼するくらい求めた。

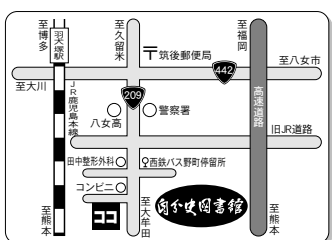
▼評論家加藤周一の「高原好日」を、高原文庫館で買ったが、このような本は通常の書店では販売されていない。信濃毎日新聞社の発行である。口カル出版の味は、郷土食、地酒のようなものである。

(T・S)

蔵書目録③ができました ¥80 円80 (郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8
TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分

インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。